報道記事から見る
岐阜の偉人たち

原富太郎（はらとみたろう）

原富太郎肖像　三溪園保勝会提供

- 羽島郡佐波村（岐阜市）出身の実業家
- 横浜市の財界リーダーとして関東大震災復興の立役者
- 三井経営の富岡製糸場の経営を立て直す
- 各地の名建築物の保護を図り三溪園に次々移築
- 三溪園を公開。三溪と号す
- 横山大観ら日本画家を支援、自らも日本画を描く
- 岐阜市の水琴亭を現在地に移築し、日本画を描く
- 益田鈍翁、松永耳庵とともに近代三茶人の一人

出身と修学

富太郎は、一九六八（慶応四、明治元）年八月二三日、厚見郡佐波村（岐阜市柳津町）の地主青木久衛の長男として誕生した。母琴は、安八郡神戸村の南画家高橋杏村の娘である。

明治一一年村の小学校「尚友義校」を卒業する（現在岐阜県歴史資料館に収蔵されている青木家文書の通知票は六年間全甲）。卒業後、母の実家神戸に住む叔父高橋鎌吉らから、書画を習った。同一三年には、日置江の青木東山の漢学塾で学んだ。青木塾の学習は、優秀生が揃い、競い合って充実していた。同一五年に、大垣の旧藩儒野村藤蔭塾に入学した。遠方であったので寮へ入った。しかし、ここでの生活は合わなかったようで、数か月後帰郷すると、再び戻らなくなり、父の説得で、挨拶に赴き退学した。帰った富太郎は、かっての青木塾に顔を出して書画をしつつ、戸長をしていた父の仕事を手伝った。また、この時期、富太郎は、貴重な経験をしている。

それは、神戸の杏村の影響を受けた高橋壽山という事業家に接したことであった。書画を良くし、自分の書画を認めてくれる壽山にひかれた富太郎は、壽山が経営する名古屋の製氷会社を見に行った。ところが、氷が出来なくて、結局多額の借金を抱えて倒産した。その経緯を見た富太郎は、十分勝算を図らず事業に手を出すことの危険を学んだのである。

一八八四（明治一七）年四月、東京在住の旧加納藩主永井尚毅公が青木邸を訪問した。その際、富太郎は、加納本陣から永井公を人力車で迎え、到着後は茶の接待をした。修練していた茶道を生かしたのである。その時永井公に求められ、自らの書画の作品を披露すると、その出来映えに見入った永井公から、いくつかの作品購入を申し込まれた。富太郎は、それらに一か月かけ補筆し完成させて東京へ送った。目の肥えている旧藩主のお買い上げに、自信を持った。

一八八五（明治一八）年四月、一七歳の富太郎は、東京専門学校（早稲田の前身）に入学し、政治・法律を学んだ。この上京は、船旅であったという。おそらく長良川を桑名へ下り、桑名で東京行きの船に乗り替えたのであろう。政治・法律を学ぼうとしたことは、父久衛が、単なる地主でなく、庄屋、維新後は戸長を勤め、小学校開設、地租改正、治水等公務に取り組む姿を見たり、手伝いをしたことがベースにあった。その上、当時は、富国強兵、近代化が大課題の時代であり、その時代を生き抜くには、政治・法律は必須の学問という認識があったからであろう。それまでの書画の世界だけでは、あきたりないとしていたのであろう。

原屋寿子との出会いと原家入り

東京での学生生活の資金調達に、跡見女学校の助教をしている。校長の跡見花蹊（かけい）は、上京前に、青木塾の先輩遠藤義為（よしなめ）から紹介されている。上京すると先ず跡見校長を訪ね、助教の職を得たと思われる。教授したのは、漢学・歴史であった。この跡見女学校との縁は深く、跡見女学校の卒業間近の原屋寿子（やすこ）と出会った。

屋寿子とは、新橋ステーションの構内で、下駄の鼻緒が切れていたのを見た富太郎が、自分の手拭いを裂いて挿げ替えたことに始まった。と富太郎は日記に書いている。しかし、富太郎は跡見女学校の助教をしていたので、それ以前から顔見知りではあったであろう。

その出会いは、富太郎が東京専門学校を卒業した年であった。

富太郎と屋寿子の恋を知った跡見校長は、二人の結婚のために、富太郎の実家青木家を訪れ、久衛に会い、結婚承認を取り付けている。一方、横浜の財界のトップで市議会議長もしていた善三郎は、孫娘屋寿子の結婚相手は、原家に釣り合う財界人の息子であればと、当初反対であったという。東京専門学校を設立した大隈重信と跡見花蹊は、親しい関係にあったことから、花蹊は大隈に相談し、善三郎と富太郎の面談を実現させた。善三郎は、富太郎が気に入り、屋寿子と結婚して、もう一軒の原家を作ってほしい、子供が生まれたら、その一人を私の相続人にしたい、と提案していた。花蹊が、岐阜から帰った翌月の六月一三日、原家で屋寿子との結婚式が行われた。富太郎二三歳、屋寿子一八歳であった。屋寿子と結婚した富太郎は、原商店に入り、その丁稚小僧の精神で、善三郎の経営ぶりを勉強した。

そんな折の一八九一（明治二四）年一〇月二八日、郷里岐阜では、濃尾大震災が発生した。その報を受け、復興の手助けのため帰郷することにした。その際、善三郎に、救済金二〇〇円を所望したところ、屋寿子からの要望もあると言いつつ、四〇〇円を持参しなさいと、渡してくれた。富太郎は、一人の社員を伴って、開通したばかりの東海道線で名古屋まで来たが、それより以西は、橋が落ちていて不通であった。やむなく、人力車を頼み、佐波にかけつけた。

途中、焼け野原の笠松に驚いた。郷里佐波の被災もひどかった。彼は、佐波の実家や親戚だけでなく、村の復興に救済金を割いて、復興を励まし、横浜へ帰った。

善三郎の死と経営改革

富太郎が原家へ入った頃、善三郎は、事業を広げ、群馬県に、地域の人達が働く製糸工場を設置し、蒸気機関を備えて、製糸の近代化を図った。勢い盛んな当時の善三郎は、出身地の埼玉県第五区から立候補して、衆議院議員になって、「輸出税全廃」などを主張していた。七年後、改正通商条約が認められ、その主張は前進したが、病魔に見舞われ、病床についた。明治三二年、善三郎は没した。行年七一歳であった。

善三郎没後の原商店の経営を任された富太郎は、個人企業の商店を合名会社にして、古参の番頭たちには、多額の退職金を支給して、こころよく退職してもらった。その後には、官立横浜生糸検査院の検査部長をはじめ、東大、東京外語、慶応、早稲田、中大などの出身者を積極的に採用して、人材の確保に努めた。当時の日本の輸出額の八〇％は生糸であったが、外国商人の買い付けを待つ形態で、安く叩かれて売ることが多かった。富太郎は外国語の話せる者を外国の各地へ派遣して、注文を取って、売り込みを図ることとした。即ち、世界各地に代理店を置き、日本の生糸や絹織物の良さを十分見せつけ、注文を取り付けたので、その輸出高は増えていった。

六月の三溪園　　三溪園保勝会提供

社員の海外派遣が全て成功したのではなく、モスクワ出張所員として派遣した東大法学部出身の社員は、金銭にだらしなく、四五万円の欠損を出す始末であった。人材を見極める必要に迫られた。それとともに、海外直輸出事業が、会社本体に影響の無いように、原輸出会社を設立して、独立させた。経営の刷新、改革を進める一方、「生糸貿易概況」、「生糸日報」、「横浜新報」を出して、経済情報の収集と広報に努めた。「横浜新報」は、やがて、「横浜貿易新報」と合併して、「神奈川新聞」となっていった。

富太郎は、生糸、やがて絹織物の貿易で富の集積を、第二銀行の頭取として、地域産業の発展に役立つことにも心を砕いた。実業家として成功したことから、経営不振で倒産しかけた工場や企業の再生や後始末を担うこともあった。三井が経営に行き詰まった富岡、栃木、名古屋、四日市の製糸場を引き受け、経営を立て直した。その手段として最初に手を付けたのは、働く女工など従業員の待遇改善であった。従業員の働く環境改善を大切にしたのである。

近年、富岡製糸場は、世界産業遺産に認定されたが、その際、今日に姿を留めているのには、富太郎の働きがあったことが記事に載るべきであった。

一九二〇(大正九)年、原合名会社と並んで、横浜財界をリードしていた茂木合名会社が、倒産した。この後処理を任された富太郎は、先ず、茂木の銀行七十四銀行を整理し、横浜興信銀行を設立、その頭取となって、負債処理に当たった。身近に数人の人材を引き寄せ、全国の多くの債権者に支払い延期という困難な業務を徹底して行い、順次後始末を行った。このとき、原富太郎という実業家への信頼、信用がそれを可能にした。

富岡製糸場